

## 事業内容

全国26か所の博物館、資料館等が開催する海、船、川、湖沼に係る27の企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示を通して海事知識の普及啓発を図った。また、海と船の巡回展展示アイテム10点及び平成19年度延長事業として追加制作した人気アイテム7点を全国8か所の博物館、資料館等に貸し出し海と船の巡回展を開催し、海と船の博物館ネットワークホームページにて、海と船の企画展情報及び海と船の巡回展情報を告知し、ホームページの保守・運営を行った。さらに、企画展支援等についての意見を集めるための企画委員会の開催や、全国の過去支援館を対象とした研修会を開催し、博学連携及び支援事業をテーマとした研修会を開催した。

### 1. 「海と船の企画展」への支援（26館27企画展）

- ①名 称：特別展「横浜開港百五十年－神奈川・世界との交流－」  
主 催 者：神奈川県立歴史博物館  
開催時期：平成21年4月25日（土）～平成21年6月14日（日）  
場 所：神奈川県立歴史博物館  
内 容：開港により、異文化交流の舞台となった神奈川県域の様相を、当館の展示テーマでもある「文化の交流と変容」の視点に立ち、神奈川の国際性をあらためて検証し、特色ある神奈川の歴史的一面を観覧者へ伝える。
  
- ②名 称：シーラカンス展－ブラジルの化石と大陸移動の証人たち  
主 催 者：徳島県立博物館  
開催時期：平成21年4月25日（土）～平成21年6月14日（日）  
場 所：徳島県立博物館  
内 容：生きている化石として知られるシーラカンスを通して、大西洋ができた頃の様子、やかつて地球上にパンゲアと呼ばれる一つの超大陸があったことを紹介する。
  
- ③名 称：なぎさの記憶・瀬戸内の太平洋戦争－戦艦大和の時代と人々の暮らし－  
主 催 者：備前市歴史民俗資料館  
開催時期：平成21年7月4日（土）～平成21年8月23日（日）  
場 所：備前市歴史民俗資料館  
内 容：岡山県備前市は、大小10以上の島があり、特に日生諸島は「日生千軒みな漁師」といわれるように、人々は漁業・海運などと正面から向

き合って暮らしてきた。しかし、太平洋戦争の間、備前市を含む瀬戸内の島々、また沿岸で暮らす人々は、総動員体制に伴う生活の変化を余儀なくされた。本展では、戦時中の瀬戸内海域での暮らしを写真パネル・資料で紹介し、日生諸島などの瀬戸内の暮らしを紹介する。

④名 称：特別展「八戸のみなど」

主 催 者：八戸市博物館

開催時期：平成21年9月19日（土）～平成21年11月8日（日）

場 所：八戸市博物館

内 容：八戸市の市制施行80周年記念にあたる平成21年度は、鮫(さめ)漁港修築工事着工90周年記念と貿易港開港70周年の節目の年でもある。これを機に、地域経済の発展を支えてきた八戸のみなどの歩みと、その発展のために注がれてきた人々の思いを振り返るとともに、現在の八戸港の様子も紹介する。

⑤名 称：日蘭通商400周年記念展「阿蘭陀とNIPPON～レンブラントからシーボルトまで～」

主 催 者：長崎歴史文化博物館

開催時期：平成21年10月31日（土）～平成22年1月11日（日）

場 所：長崎歴史文化博物館

内 容：2009年は平戸にオランダ商館が設置され、オランダとの通商が開始されてからちょうど400年にあたる節目の年です。鎖国体制のなかで、オランダは唯一日本との交易を許された西洋の国でした。日本とオランダの通商の歴史は、オランダ東インド会社（VOC）の活動を抜きには語れません。本展覧会では17世紀から18世紀にかけて東アジアにおける海の交易を支配したVOCの活動と日蘭交流の歴史をオランダおよび国内の博物館が所蔵する絵画や考古資料を通して紹介します。

⑥名 称：特別展「東アジアから神戸へ 海の回廊 ―古代・中世の交流と美―」

主 催 者：神戸市立博物館

開催時期：平成22年1月16日（土）～平成22年3月7日（日）

場 所：神戸市立博物館

内 容：神戸は「海の回廊」と呼ばれた瀬戸内海の重要港湾で、また外国の玄関口としても重要な役割を果たしており、その位置づけは今日も変わっていない。当館では、近世の港湾都市をテーマとした『よみがえる兵庫津』（平成16年度）、港町神戸の歴史を親子で学ぶ『夏休み親子はくぶつかんーみなと神戸のれきしにタイムトラベラー』（平成19年

度)などを開催した。今回の企画は、東アジアを視野に入れた複数のテーマを設け、海と人々のかかわり、海を媒介とした交流の様子を検証することで、海・港・船が果たしてきた歴史的な役割について理解を深める展示である。

⑦名 称：最後の刃刺：古式捕鯨の終焉とアメリカ捕鯨そしてノルウェー式捕鯨の導入

主 催 者：太地町立くじらの博物館

開催時期：平成22年2月15日（月）～平成22年3月15日（月）

場 所：太地町立くじらの博物館

内 容：日本、アメリカ、ノルウェーという三国の捕鯨の伝統が、19世紀末から20世紀初頭の日本を舞台にして交錯する様子を博物館展示として表現することで、三国それぞれの捕鯨の伝統を紹介するだけにとどまらず、世界各地に存在する捕鯨の伝統が、時に相互に関係を持ちながら多様な姿を形作ってきたことを考察する。本展示は太地町立くじらの博物館がアメリカのニューベッドフォード捕鯨博物館ならびにノルウェーのサンデフィヨルド捕鯨博物館と進めている学术交流の成果の一部を公開する機会として位置付ける。

⑧名 称：「海賊一室町・戦国時代の東京湾と横浜一」

主 催 者：横浜市歴史博物館

開催時期：平成21年4月4日（土）～平成21年5月10日（日）

場 所：横浜市歴史博物館

内 容：中世横浜の湊である六浦・神奈川両湊と、その他の東京湾岸の湊との関係について、主に戦国時代の小田原北条氏と里見氏との海賊戦を中心に資料を展示する。あわせて関東の政治史を海から捉えて解説する。この企画により、中世から現代まで続く、人々と海との関わりを紹介する。

⑨名 称：マンタの海流大冒険 ～まぼろしの海神王国をめざして～

主 催 者：萩博物館

開催時期：平成21年7月4日（土）～平成21年8月31日（日）

場 所：萩博物館

内 容：世界最大・最強の海流「黒潮」とはいったいどんなもので、遠く離れた日本海の萩にまでいかなる影響をもたらしているのか。そして、我々は目下生じている郷土の海の異変にどのように対応すべきなのか。これらの謎や課題を、暗幕・照明などで臨場感を演出した下記10の展示ゾーンに編成。それら各ゾーンを来場者が巨大エイ・マンタ（オ

ニイトマキエイ)と共に巡って謎を解きながら探検できるテーマパーク風に紹介する。

- ⑩名 称：戦前・戦後のポスターに見る日本商船  
主 催 者：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館  
開催時期：平成21年7月17日（金）～平成21年10月31日（土）  
場 所：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館  
内 容：仲島忠次郎コレクションの一部である戦前・戦後の船舶ポスターなどを展示の中心として、山田早苗コレクションによる近代日本商船隊の模型と行動記録より日本商船の働きを懐古すると共に役割を再認識する機会を提供する
- ⑪名 称：全国鯨フォーラム 2009 開催記念特別展 釧路沖のクジラたち  
主 催 者：釧路市立博物館  
開催時期：平成21年9月19日（土）～平成21年11月3日（祝・火）  
場 所：釧路市立博物館  
内 容：道東沖のクジラ類の生態についての紹介を行い、釧路沖のミンククジラやシャチ、シャチの音声コミュニケーション、クジラのヒゲ、釧路沖の海の生物等について、釧路沖の豊かな海についての理解を深める展示にする。
- ⑫名 称：巡回展「川と海を旅する魚たち」  
主 催 者：埼玉県立川の博物館  
開催時期：平成21年9月26日（土）～平成21年11月23日（月）  
場 所：埼玉県立川の博物館  
内 容：近年、回遊魚の生活史が解明されつつある。海と川を回遊する魚のなかには、サケ・ウナギなどの身近な食材もある。その回遊のメカニズムを理解し、私たち人間との関わりについても考えるきっかけとなる展示を行う。
- ⑬名 称：舟から船へー原始から近世までの日本船の変遷を探るー  
主 催 者：千葉県立関宿城博物館  
開催時期：平成21年10月6日（火）～平成21年11月29日（日）  
場 所：千葉県立関宿城博物館  
内 容：舟は、原始・古代より漁労・移動・運搬などの手段として人々の生活に密接な関わりをもっていた。また、大陸の文化伝播の一翼を担うとともに時代を追って大形な構造船が建造され、軍事・産業・観光など多様な発展を遂げている。ふねは、丸木をくり抜いた部材を利用する

船底構造をもつ独木舟や準構造船から、次第に板材を組み合わせた構造船へと変化・発展していく。前者を「舟」、後者を「船」という漢字を用いることが多い。本展覧会では、舟（船）の構造変化や社会に果たした役割の変遷をたどりながら、舟（船）と人々とのつながりについて解説する。

⑭名 称：新発見！忠臣蔵と旗本浅野家－旗本の職務と川海の役割－

主 催 者：たつの市立龍野歴史文化資料館

開催時期：平成21年10月17日（土）～平成21年12月6日（日）

場 所：たつの市立龍野歴史文化資料館

内 容：忠臣蔵で知られる赤穂浅野家の分家 旗本3,000石の若狭野浅野家の資料が一括発見された。その中には本家浅野家歴代の資料と旗本として幕府の役職についての記録、絵図類が多量に発見された。特に事件当時の当主浅野長恒は、伊勢山田奉行として遷宮の御用材が初めて木曾から木曾川を使って運ぶ責任者を務め、元禄事件後は復職、堺奉行として初めて新大和川、石川の管理を行い、河川、港の管理を行っている。このような幕府要職にあった旗本の資料がまとまって残されている例はなく、特に河川、堀、火消のような水に関する資料も多く、歴史的な事件の検証資料として初めて公開する。

⑮名 称：チリモン積もって山となる～これがチリメンモンスターだ！～

主 催 者：きしわだ自然資料館

開催時期：平成22年1月19日（火）～平成22年3月14日（日）

場 所：きしわだ自然資料館

内 容：チリメンジャコの中に混じるカタクチイワシ以外の生き物をチリメンモンスターと名付け、それらの種類や生態・漁獲方法を紹介することにより、日本近海の環境や漁業について知ってもらうきっかけとする。

⑯名 称：島津斉彬展 一大海原に夢を抱いた殿様－

主 催 者：尚古集成館

開催時期：平成21年7月4日（土）～平成21年9月17日（木）

場 所：尚古集成館

内 容：1840年代、薩摩藩は、日本の他地域よりも早く通商を求める西欧列強の圧力にさらされました。島津斉彬(なりあきら)は、これに強い危機感を抱き、「集成館事業」という近代化事業に着手しました。その中で力を注いだのが造船事業でした。斉彬は国を守るためには海軍力の強化が必要、外国との交易も「此の方より押しかけて開くを上策」と考え、海運力の整備も必要と考えていました。日本の船が世界中を行

き来する時代が来ることを夢見た斉彬の生涯を追った展示。

⑰名 称：特別企画展 船と海の博覧会

主 催 者：兵庫県立歴史博物館

開催時期：平成21年7月11日（土）～平成21年9月23日（水）

場 所：兵庫県立歴史博物館

内 容：世界と日本の船の歩みを精巧な模型などを通して紹介する。あわせて海や船のすばらしさや不思議さなどを伝えるハンズオン展示を行い、海洋に関する関心を高める機会とする。

⑱名 称：獣骨を運んだ仲覚兵衛と薩南の浦々

— 知覧・穎娃に残る海運資料と発掘調査速報展 —

主 催 者：ミュージアム知覧

開催時期：平成21年7月18日（土）～平成21年11月3日（火）

場 所：ミュージアム知覧

内 容：南九州市の穎娃・知覧南部は東シナ海に面し、小河川河口を利用した天然の小港が連なる。近世～近代にかけて海運商が盛んで、関西など全国各地から海上輸送された獣骨肥料を火山灰土壌における菜種栽培へ供給していたという地域的な特異性について紹介する。

⑲名 称：船大工・越来治喜と宇保賢章の世界

主 催 者：うるま市立海の文化資料館

開催時期：平成21年7月20日（月）～平成21年8月31日（月）

場 所：うるま市立海の文化資料館

内 容：木造船の造船業で生きていた船大工たちの姿を掘り起こしながらその技術、作品、資料などを通じて失われつつある船大工と木造船の世界を広く公開する。その企画展では、現在の沖縄のなかで廃れゆく木造船の建造技術の貴重性を多くの県民や市民に教育普及することが目的である。

⑳名 称：縄文の躍動—海と生きた人々の文化—

主 催 者：千葉県立中央博物館

開催時期：平成21年9月26日（土）～平成21年11月23日（月・祝）

場 所：千葉県立中央博物館

内 容：千葉県は三方を海で囲まれ、縄文時代においても漁撈に生業の比重をおいた海洋民の文化が育まれていた。貝塚も全国最多の約700か所が所在し、明治時代から今日に至るまで多くの貝塚が調査され、貝塚でのみ遺存する人骨や骨・角製の道具・装身具等がわが国の縄文文化解

明に大きな役割を果たしてきた。このことから、主要な縄文時代貝塚を中心とした成果を縄文時代に生きた人々の文化遺産という視点で展示し、縄文の躍動感を体感していただく。

- ②①名 称：平成 21 年度 沖縄県立博物館・美術館 博物館特別展  
薩摩の琉球侵攻 400 年「琉球使節、江戸へ行く！～琉球慶賀使・謝恩使一行 2,000 キロの旅絵巻～」  
主 催 者：沖縄県立博物館・美術館（歴史）  
開催時期：平成 21 年 10 月 6 日（火）～平成 21 年 11 月 29 日（日）  
場 所：沖縄県立博物館・美術館（歴史）  
内 容：琉球王国から徳川将軍へあいさつをするために派遣された琉球使節は、海を越えて片道約 2,000 kmにおよぶ長旅をし、中国との外交を背景とした王国の独自性と、その教養や文化の高さを大きくアピールした。本展示会では、使節たちの旅をとおして、琉球王国の対薩摩・江戸との外交および九州から江戸にまたがる地域との広く深い結びつきを示し、琉球王国の外交と、各地への見聞を広げる機会とすることを目的とする。
- ②②名 称：平成 21 年度 沖縄県立博物館・美術館 博物館企画展  
「造礁サンゴ楽園をつくった偉大な建築家～」  
主 催 者：沖縄県立博物館・美術館（自然史）  
開催時期：平成 22 年 2 月 5 日（金）～平成 22 年 3 月 14 日（日）  
場 所：沖縄県立博物館・美術館（自然史）  
内 容：現在、危機的状況にある沖縄のサンゴの保全を効果的に進める上で、一般県民の理解と支援は不可欠である。本企画展では、サンゴ礁が「共生」によって成り立つということを造礁サンゴの生物学的特徴からとらえ、造礁サンゴがいかに重要な存在であることを伝える。
- ②③名 称：はるばる海を渡り来て  
主 催 者：神戸市埋蔵文化財センター  
開催時期：平成 21 年 10 月 10 日（土）～11 月 29 日（日）  
場 所：神戸市埋蔵文化財センター  
内 容：4 世紀末から 5 世紀初頭にかけての播磨の前方後円墳とともに渡来人の痕跡とされる古墳や出土遺物を中心に展示を行い、渡来人の動向とその果たした役割を検証することを目的とします。
- ②④名 称：平家一門の栄華と瀬戸内海－海原を駆けぬけた清盛の夢  
主 催 者：広島県立歴史博物館

開催時期：平成21年10月16日（金）～平成21年11月23日（月・祝）

場 所：広島県立歴史博物館

内 容：平安時代末期に武家による政権を初めて樹立した平家一門は、近年の研究により、武家政権の先駆的な施策を行ったことが積極的に評価されてきている。この企画展では、平氏政権の施策のなかでも、とくに経済施策に注目し、瀬戸内海から九州にかけての海上交通を掌握し、東アジア世界との交易を視野に入れたダイナミックな施策を試みていたことを、さまざまな資料によって紹介するとともに、その後の社会・文化に与えた影響について考える機会を提供する。

②5名 称：海が繋いだ薩摩－琉球

主 催 者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

開催時期：平成21年10月16日（金）～平成22年1月13日（水）

場 所：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

内 容：地理的に数百キロを隔てた薩摩（鹿児島）と琉球（沖縄）。両者の間には、道の島とも呼ばれた南西諸島づたいの「海の道」を介して、古来より人・物（情報）が行き交った。日本列島の南部を形成する南西諸島を舞台に展開した、薩摩と琉球の海洋交流史を紐解く。

②6名 称：マリンサイエンスギャラリー「海の生きものの共生  
－パートナーシップの多様性－」

主 催 者：千葉県立中央博物館分館海の博物館

開催時期：平成22年2月20日（土）～平成22年5月9日（日）

\*ただし4月1日（木）以降5月9日（日）までは自主開催

場 所：千葉県立中央博物館分館海の博物館

内 容：海洋生物には、他の動物と共生する種類が数多く存在することから、海洋生物に見られる様々な共生関係の事例を紹介し、その生活様式の多様性を深く掘り下げて紹介する。

②7名 称：特集展示「アメリカに渡った日本人と戦争の時代」

主 催 者：国立歴史民俗博物館

開催時期：平成22年3月16日（火）～平成22年3月31日（水）

※平成22年4月1日（木）～平成23年4月3日（日）の期間は自主開催

場 所：国立歴史民俗博物館

内 容：日本と欧米の間を移動した人々の視座から、近代の日本社会を見直そうとするものである。これは、単に「移民」を展示するというのではなく、「移民」をめぐる発送や考え方そのものを革新しつつ、移動



するものの眼から、20世紀を切り取ってみようという試みである。

## 2. 巡回展の開催（8館）

①主催者：函館市灯台資料館（1号機利用）

開催時期：平成21年5月1日（土）～平成21年5月31日（月）

場 所：函館市灯台資料館

②主催者：兵庫県立歴史博物館

開催時期：平成21年7月11日（土）～平成21年9月23日（水・祝）

場 所：兵庫県立歴史博物館

③主催者：なにわの海の時空館

開催時期：平成21年10月1日（木）～平成21年10月25日（日）

場 所：なにわの海の時空館

④主催者：きしわだ自然資料館

開催時期：平成22年1月19日（火）～平成22年3月14日（日）

場 所：きしわだ自然資料館

⑤主催者：笠沙恵比寿

開催時期：平成21年6月6日（土）～平成21年7月25日（土）

場 所：笠沙恵比寿

⑥主催者：ぐんまこどもの国児童会館

開催時期：平成21年8月1日（土）～平成21年8月30日（日）

場 所：ぐんまこどもの国児童会館

⑦主催者：八甲田丸

開催時期：平成21年9月5日（土）～平成21年11月3日（火）

場 所：八甲田丸

⑧主催者：三菱みなとみらい技術館

開催時期：平成22年1月9日（土）～平成21年3月14日（日）

場 所：三菱みなとみらい技術館

### 3. 博物館ネットワークの保守、運用

インターネットを活用し、「海と船の博物館ネットワーク」WEBサイト上にて全国の海事関係博物館施設の情報を広く公開し、「海と船の企画展」情報及び「海と船の巡回展」情報の公開を実施した。

### 4. 企画委員会の開催

海事関連有識者を交え、「海と船の博物館ネットワーク」事業の今後の目標や方向性についての意見を頂戴した。

### 5. 支援館の研修会の開催

2006年度より船の科学館が事務局として支援した全国の博物館等を対象とし、「海と船の企画展」支援事業を中心とした要望の取りまとめや、過去支援企画展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換を目的とした「ネットワーク研修会」を開催した。それに合わせて、過去2回西日本にて実施された「博学連携ワークショップ」を本研修会の一部とし、博物館職員及び教員を交えた博学連携事例作成ワークショップや情報交換、有識者による講演会等を海洋政策研究財団の協力のもと同時開催した。

## 事業目標の達成状況

### 1. 「海と船の企画展」への支援

実施27企画展ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性を活かした企画展を通して、海事知識の啓発を広く図ることができた。

#### ①主催者：神奈川県立歴史博物館

入場者数：16,242人

成果：前年度の同時期の企画展は、本特別展より開催日数が6日間多い51日間であったこと、また、本特別展の開催期間中に新型インフルエンザの国内患者が発生・流行した影響もあり、比較すると入場者が減少したが、過去5年間に開催された17の特別展の中では、2番目に多い来館者数となった。特別展記念講演会を2回（受講者65名+69名）、特別展関連行事として県博セミナーを計5回（受講者47名+46名+44名+45名+43名）、子供博物館教室「『黒船』を作ろう！」を1回（参加者19名）を開催し、延べ378名の方に参加していただいた。特別展開催期間中の4月25日に、開港百五十年を記

念して、社会人吹奏楽団「浦賀ウィンドオーケストラ」招き、ペリーの久里浜上陸時に軍楽隊・鼓笛隊により演奏された曲などを紹介する吹奏楽コンサート『吹奏楽で辿る世界の歴史』を開催し、60名の方に参加していただいた。

②主催者：徳島県立博物館

入場者数：15,476人

成果：前年度の同時期の企画展は、人文系の展示であり、子どもの入館者が少なかったが、シーラカンス展は、子どもの来館が多かった。開催期間中に神戸、大阪を中心に新型インフルエンザが流行し、その影響を受け、入場者数が減少した。特に遠足での来館を取り止める小学校が数校あった。展示解説は、3回実施し、どの回も多くの方に参加していただいた。また、多くの質問も受け、満足度も高かったと考えている。本来、「シーラカンスのペーパークラフトをつくろう」の行事を多くの方に参加していただけるように子どもの日フェスティバルに実施する企画もあったが、工作にかかる時間が長く、難易度もやや高かったため、子どもの日フェスティバルでの実施をやめ、普及行事として人数制限をして実施した。結果、参加できる人数は、減ったが、時間をかけてシーラカンスについてのレクチャー等を行うことができた。

③主催者：備前市歴史民俗資料館

入場者数：866人

成果：第38回企画展「なぎさの記憶・瀬戸内の太平洋戦争 ―戦艦大和の時代と人々の暮らし―」には、43日間に来館者866人（1日平均20.1人）で、申請時目標入場者数の750人より多くの方に来館していただいた。また、愛知県や埼玉県など遠方の地域からの来館者もあった。来館者アンケートでは、企画展の内容・展示資料について「とてもよかった」と「よかった」の評価が9割を超え、今後も同様の企画を求める記述も散見された。また、呉市海事歴史科学館から資料を借用することができ、海や船舶関係の博物館・資料館との新たなつながりもできた。備前市域以外の県内外から借用した資料や写真資料により、戦争時における瀬戸内地域の生活や都市／地域の様相を多面的かつ具体的に捉えられるように配慮し、理解を促進できたと考える。

④主催者：八戸市博物館

入場者数：5,177人

成果：刊行物等について、ご支援により市内小学校48校、同中学校26校、

さらに幼稚園・保育所等の児童生徒向けのチラシを用意でき、各所に配布した。(例年は館内で作成。)その他、本展では漁業の町としての八戸も紹介する意図で伝統的な漁撈用具を併せて展示したが、それに伴い、刊行済みの漁業関連の図録が平時よりも多く販売された。(2種類 昨年度同時期で4～5倍)

⑤主 催 者：長崎歴史文化博物館

入場者数：8, 323人

成 果：関連行事として講演会を4回実施し、合計257名の方に参加いただけた。開催期間中、子ども向けのワークショップを4回実施し、合計92人の参加があった。本企画展を担当した当館研究員による講演会だけでなく、日蘭交流史に関わる専門家を外部講師として招き、講演会を実施できたのは有意義であった。企画展の内容は、こどもにはやや難しい内容であったが、体験を採り入れたワークショップを行うことにより、企画展に親しみを持ってもらうことができた。また、「ガリレオ式望遠鏡づくり」では、佐賀県立宇宙科学館館長に講師を依頼し、館種を超えたネットワークをつくることができた。

⑥主 催 者：神戸市立博物館

入場者数：10, 704人

成 果：本展覧会の関連行事として講演会3回(参加者58名+52名+63名)、インフォメーションスタッフによるスライド解説(毎日2回・全88回・参加者1,761名)、こどものためのワークショップ2回(参加者16名+24名)、こうべ歴史たんけん隊(参加者35名)、その道の達人に学ぶ「仏さまの絵を描いてみよう」(参加者40名)、平成21年度ミュージアム講座⑤「古代船の絵画と造形の資料」(参加者110名)、展覧会オリエンテーション4回(参加者219名)を実施し、合計2,378名の方に参加いただけた。

⑦主 催 者：太地町立くじらの博物館

入場者数：6, 736人

成 果：出展資料を持って来て頂いたニューベッドフォード捕鯨博物館のシュアート・フランク主任学芸員ならびにサンデフィヨルド捕鯨博物館のヤン・エリック・リングスタッド主任学芸員が出席して2月14日に太地町公民館で行われた企画展開幕式典では地元の人々を中心に100名を超える入場者に対して企画展の説明を行うことができた。本企画展の文章はすべて日本語と英語で表記されており、来館者に占める外国人の割合は低いと思われるが、より多様なお客様に対応するこ

とが出来たと考えている。展示パネルおよびラベルは日本語と英語で表記され、アメリカ、ノルウェー、そしてカナダの研究者によって書き下ろされた文章を含んでおり、学術的に意味のある情報を発信することが出来た。

⑧主 催 者：横浜市歴史博物館

入場者数：13,280人

成 果：本展覧会は、横浜開港 150 年を記念する事業の一環であり、近代以前の横浜の姿を示す画期的な企画であったと考える。とくに戦国時代の海賊衆をテーマとした企画展の開催は関東地域では初めてであり、話題性に富む事業展開が出来た。事業実施にあたり、①入場者・②観覧料収入・③図録売上について目標値を設定した。②③については大幅に上回ったものの、①については前年度よりかなり減少している。これは、昨年の展覧会テーマが考古遺跡のイラスト展で子供たちにも親しみやすいものであり、なお展覧会期間中の全ての月曜日に企画展示室を開室して、社会科見学等で博物館を訪れる小学生を入館させたことによる。今年度は子供たちにはやや難解なテーマであり、さらに博物館が月曜日開館を行っていても、企画展示室は資料保護のため閉室していた。これらの要因により、入館者数に大きな差違が生じたと考える。

⑨主 催 者：萩博物館

入場者数：32,565人

成 果：本展では、申請時の目標入場者数 25,000 人をはるかに超え 130%となる 32,565 人の入場があった。これは、19 年度夏に日本財団助成により当館で開催した「君と竜宮城へ～知られざる深海への旅～」展の 26,408 人（58 日間）、その翌年（20 年度）夏に独自開催した昆虫をテーマとした企画展 28,848 人（51 日間）の入場者数を抜き、当館としては史上最多である。ただ、本展の総入場者数を会期日数 59 で割って算出した 1 日あたりの平均来場者数は 552 人で、これは 20 年度の昆虫展の 566 人にわずかにおよぼす史上第 2 位となった。一方で、本展では入場者が 1000 人を超える日が史上最多の 8 日もあり、特に 8 月 15 日は 1 日だけで来場者数が 2,212 人を突破しこれも過去の無料開館期間を除いて最多記録となった。このように、本展は入場者数の面でさまざまな記録を達成した展示となった。入場者に自由に用紙をとってもらい無記名で記入して投函してもらう形式のア

ンケートを実施したところ（回答者数 1,901 人：来場者の 5.8%）、本展示を目的として入場した人が約 67%にも達し、また、小学生の入場者も約 67%に達した。平時は市内の観光名所とあわせて当館で開催中の企画展に入場する年配層の観光客が多いが、本展ではターゲットの子どもたち・親子連れが多く来場したことがうかがえる。

⑩主 催 者：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館

入場者数：1, 7 8 9人

成 果：今回の当館における「海と船の企画展」の趣旨である『戦前・戦後の船舶ポスター、山田早苗コレクション日本商船隊の模型と行動記録を使って、戦争に徴用された日本商船の存在を紹介する目的』に、当初の予測以上に一般市民の反応が強く、来館者の数だけではなく、来館者からの企画展示の内容に関する積極的な質問や充実した情報提供に対する驚嘆など、高い評価を受ける強い反応が見られた。「海と船の企画展」事業における目標達成度を数値で示すと、企画展趣旨の達成率 350%、日本の商船隊行動記録・船舶写真のデジタルブック化率（4611/4611） 100%、博物館スタッフの大規模企画運営完成率 100%、今後の事業展開への波及効果 150% 以上を総合して、事業全体の目標達成度は 100%を越えている。

⑪主 催 者：釧路市立博物館

入場者数：3, 6 5 7人

成 果：特別展開催時期の入館者数は前年度比の 28%増であった。特に無料入館者数は 30%増で、これは 10 月 10 日に釧路で開催された「全国鯨フォーラム」に参加された全国のクジラ関係者が見学（視察）に来られたことや、この特別展のために視察に来られた団体があったことなどによるものである。また、子ども（小中学校・高校生）の有料入館者が 50%増となった。地元小学校からの見学も 7 校あった。今回、クジラクイズや骨伝導体験装置など子どもから楽しめる体験型の展示をした効果もあると思われる。しかし、目標の 4000 人には届かず、もう一步、集客の努力が必要であった。また、展示を通じて(財)日本鯨類研究所、釧路沖鯨類捕獲調査団、さかまた組などクジラの調査に関わる団体との交流が生まれ、今後の当館の展示や事業についても協力していただけることになった。特別展解説書はクジラの生態および釧路沖のクジラについての分かりやすい資料となり、特別展に来られない方からの問い合わせもあり、何ヵ所かに送付した。講演会については第 1 回目については参加者が 14 名と少なかったが、骨伝導の体

験などをしてもあり、参加者にはおおむね好評だった。第2回目は遅い時間にも関わらず、40名と多くの参加者あり、さまざまクジラ・イルカ類の音声について実際に音を流しながらの講演は非常に好評であった。

⑫主催者：埼玉県立川の博物館

入場者数：23, 227人

成果：大学・研究機関・他館などとの連携で研究会（水辺の教育メディア研究会）を立ち上げ、企画展が開催できたことは今後の連携が期待できることや、様々なノウハウを吸収することができた。また、製作した展示物は今後も全国各地で巡回展示が続けられることが決まり、長期間かつ広域で活用されている。しかし、残念ながら入場者数は前年比85.3%、目標値の87.4%にとどまった。

⑬主催者：千葉県立関宿城博物館

入場者数：29, 512人

成果：前年度を上回る目標（36, 000人）を設定し、広報エリアも県内市町村だけでなく近県の埼玉、茨城の社会教育施設へのポスターチラシの配布を実施した。しかし、最も期待した関宿城まつり（10月25日）では天候が悪く予想より人出が少なく、またその他の土日の人数も思ったほどのびなかったため29, 500人あまりに留まった。参加者の感想は総じて好評で、特に大型丸木舟の展示は目をひいたようである。

⑭主催者：たつの市立龍野歴史文化資料館

入場者数：2, 874人

成果：幕府旗本の資料が一括して残っていることは非常にまれであり、今まで知られていなかった貴重な資料を一度に公開することにより、広く研究者や歴史愛好者の注目を集めた。江戸時代の幕府の職制や赴任地の歴史を解明する上で貴重な資料公開となり、各方面からの問い合わせや調査依頼が頻繁にあり、図録を作成することで、今後の研究に資する機会を提供した。忠臣蔵と関連付けて展示することにより、忠臣蔵ファンや歴史愛好者を呼び、多くの来館者に江戸時代の川海の役割についても関心を持っていただけた。

⑮主催者：きしわだ自然資料館

入場者数：3, 786人

成果：今回は、展示直後からマスコミの取材を受け、全国に周知されたこと

により、多くの来館者がおとずれたと思われる。また、2009年夏に全国にむけて発行されたチリメンモンスター関係の冊子（幻戯書房「チリモン博物誌」・偕成社「チリメンモンスターをさがせ！」）を読んで来られた方も多かったことから、通常の特別展より多くの来館者に恵まれたと考えられる。なお、今回は見学者向けに、チリモンについて説明した無料配布パンフレットを印刷することができたことで、展示を見終わってからも内容を振り返ることができ、通常の企画展より理解が深まったと思われる。展示内容としては、拡大装置などのハンズオン展示、精巧なフィギュアなどによって、各年代層が海の生物について理解しやすかったのではないかと思われる。そのほか、今回はきしわだ自然友の会チリモンメンバーによって、館内で随時行われた「チリモンさがし実習」も、来館者に好評であり、チリモンさがしを行いたいために、何度も来館した方もいた。

⑩主 催 者：尚古集成館

入場者数： 54, 019人

成 果：島津斉彬展—大海原に夢を抱いた殿様—は、1840年代、薩摩藩が日本の他地域よりも西欧列強の圧力にさらされ、藩主島津斉彬がこれに対処するために「集成館事業」という近代化事業を展開したことを紹介した展示である。特に外国と積極的に交わるという夢を実現させるため、外国から侵略されないための海軍力の強化と海運力の整備が必要と考え、造船事業に力を注いだことを多くの人に知っていただくことを目的としていた。その意味では目標入館者数を達成し、館の事業成果は100パーセント達成したといえる。

⑪主 催 者：兵庫県立歴史博物館

入場者数： 17, 434人

成 果：今回の展覧会入場者は、17,434人で、昨年の同時期の特別企画展「光と影のワンダーランド～アニメのルーツをさぐる」(平成20年8月9日(土)～9月28日(日))を含む同時期の入場者24,758人の70.4%、また一昨年の企画展「こどもたちのロマンワールド～昔のこども本と遊ぼう」(平成19年7月14日(土)～9月2日(日))の入場者57,610人を参考とした申請時目標入場者50,000人に対して34.9%の達成率となった。

⑫主 催 者：ミュージアム知覧

入場者数： 14, 307人

成 果：この企画展では、知覧・穎娃の浦々の歴史において、江戸時代中期に



仲覚兵衛ら海運商人が確立し、後に薩摩藩専売となった獣骨肥料流通を軸としてクローズアップした。江戸時代、全国的に普及していた金肥は干鰯であったのに対し、薩摩藩では海運商人が全国各地の被差別地域から牛・馬骨、土佐・紀伊などの捕鯨地域から鯨骨を運び、肥料としていた。このテーマを、博物館企画展として初めて取り組んだものである。目標入館者数は達成できなかったが、県内外からの反響も高く、これまでに変わる新しい歴史観を印象付けたという意味では、館の事業成果として100パーセント達成したといえる。

⑲主 催 者：うるま市立海の文化資料館

入場者数：6, 311人

成 果：成功した点は、海と船の博物館ネットワーク（事務局）のご指導と他の機関のご協力により目標入場者数、印刷物の発刊、新聞宣伝等がうまく進みました。企画展はもちろん、「船の模型づくち親子たいけんきょうしつ」、講談社公認「王海走」への入場者数も予想以上に多く、好評であった。

⑳主 催 者：千葉県立中央博物館

入場者数：28, 648人

成 果：目標達成度の評価を5段階評価すると、目標の入館者数が4、地域住民との連携が4、関係機関との連携が4、地域文化の理解が4となる。県内外の縄文時代の一級資料の展示により、専門家から一般県民にいたるまでの好評を得た。また、身近にありながら知られる機会の少なかった縄文時代の貝塚及び縄文人の海との関わりについての理解を深めることができた。

㉑主 催 者：沖縄県立博物館・美術館（歴史）

入場者数：6, 680人

成 果：特別展の開催時には、展示会の開催にかかる全予算のうち6割の収入を見込んだ入館料の設定を行っている。そのため、入館者数は11, 920人を目標としていたが、実際にはその56%の入館者数となった。展示関連催事には延べ1, 000名以上の方が来場し、沖縄の歴史に対する県民の関心の高さを実感することができた。また、関連講座と展示解説会を同日に行うことによって、来場者の誘致を行うことができた。

㉒主 催 者：沖縄県立博物館・美術館（自然史）

入場者数：3, 582人

成 果：2007年度の同時期の企画展「新収蔵品展」の会期は2月13日～4月10日であったため、比較資料として、3月の博物館入場者（22,980人）に対する新収蔵品展入場者（4,302人）の割合を求めると18.7%となり、博物館全体の目標入館者数25,000人とした場合の企画展の目標入場者数は4,675人（25,000人×0.187）となる。企画展「造礁サンゴ」の入館者数は3,582人で、1ヶ月あたりに換算すると、3,582人／33日×31日＝3,364人となる。したがって、実質的な目標達成度は3,364人／4,675人×100%＝72%となった。開館年度は全体的な入館者数をもっとも多かったという背景をかんがみると、72%は悪い数字とはいえないと思われる。数値的には上述のような結果であったが、企画内容からは十分な入館者を確保したと考えていない。その理由は、観覧者の多くが展示に満足しており、観覧後のメッセージメモにも企画や展示内容に対する好意的な意見とともに広報不足を指摘したものが多かったことからである。

㊸主催者：神戸市埋蔵文化財センター

入場者数：4,458人

成 果：昨年度実績比30%増・目標11%増であった。入館者は滞在時間も長く、関心が高かったと評価できる。播磨地域を中心に大陸系の遺物の出土品を借用し展示することで、埴輪の変遷を時間軸としながら、埴輪形成技術への大陸からの影響の時期やその影響の増加時期が一目でわかる興味深い展示となった。古墳時代の陶質時が播磨地方に5世紀に大量にもたらされており、多くの移住者の存在が改めて確認されたことは、意義深い。海外との交流の幕開けと言える時代であった、港町神戸の原型ともいえる姿が古墳時代には見え始めており、周辺地域との交流も含めて興味深い展覧会であった。

㊹主催者：広島県立歴史博物館

入場者数：4,463人

成 果：前年度同一期間は、名古屋の徳川美術館の協力を得て、特別展「徳川家・姫君の華麗なる世界」を開催していた。この特別展は、複数年間隔で地元経済界から経費を得て開催しているもので、通常の企画展と比べ予算規模も大きく、全国巡回展の開催などを行っている。特に、昨年度の「徳川家・姫君の華麗なる世界」は、大河ドラマ「篤姫」の影響により会期中42,946人の入館者を得ており、特別展を開催しない年と比較すると8～10倍であった。

㊺主催者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

入場者数：2, 284人

成 果：当該企画展では、鹿児島県内各地に残された、琉球関係の諸資料を展示し、数百キロにも及ぶ海上の道で繋がった薩摩と琉球の海洋交流史について、広く一般市民に向け紹介を行いました。新しい視点での薩琉交流史の掘り起こしという意義から、地元新聞に企画展記事が5回シリーズで連載されるなど注目され、沖縄からの来館、遠方からの図録入手の問い合わせが増加するなど、これまでにない教育普及効果もありましたが、入場者数という点では、期間内入館者数が申請時目標入館者数に比し76%の目標達成率となり、今回は当初の入館者数目標に及びませんでした。

②⑥主 催 者：千葉県立中央博物館分館海の博物館

入場者数：8, 126人

成 果：入場者のアンケート結果からは、クマノミ類等の生体展示や、オニヒトデやムチカラマツ等の大型標本が特に人気があり、生き物の共生関係に強い関心を持ったという回答が多く、高い評価を受けていると考えている。また、この事業を横断幕やポスター・リーフレットで知ったという回答が多く、助成を受けての広報が効果的であったと考えられる。

②⑦主 催 者：国立歴史民俗博物館

入場者数：11, 963人

成 果：申請当初目標としていた入場者数を大きく上回る結果（目標入館人数の144.4%）を収めることができた。特集展示自体の広報活動は最小限ながら、昨年度より大幅に入館者を増やした理由は、同時に開室した第6展示室「現代」の入館者の影響が大きいといわざるをえないが、結果的に多くの入館者に特集展示を見ていただくことに成功した。

## 2. 巡回展の開催

巡回展展示アイテム10点（1号機）及び、追加製作した人気の7点（2号機）を、全国8か所の博物館、資料館等において開催し、子供たちを中心とした海事知識の普及啓発を図ることができた。

①主 催 者：函館市灯台資料館（1号機利用）

入場者数：695人

成 果：函館市民はもとより、隣接の「ホテル恵風」利用者及び観光者に広くその意義を伝え、資料館利用者の増大を図った。

②主 催 者：兵庫県立歴史博物館（1号機利用）

入場者数：17,434人

成 果：借用した10の体験アイテムを通して海の不思議さ、すばらしさなどを来館者に理解していただくとともに、「夏休み親子シリーズ」として、親子や家族が楽しみながら学習できる場を提供することができたと考えている。

③主 催 者：なにわの海の時空館（1号機利用）

入場者数：6,941人

成 果：借用した7アイテムを常設展示場1階のエレベータ前に配置。アイテムを展示室外に置いたのは、体験する様子がどこからでも見通せ、だれでも自由に参加しやすいような雰囲気を作るため。観覧者の滞留時間も長く、親子で展示物を手にとって楽しむすがたが多く見られた。

④主 催 者：きしわだ自然資料館（1号機利用）

入場者数：3,786人

成 果：本巡回展は企画展「チリモン積もって山となる～これがチリメンモンスターだ！」の展示において、成魚と稚魚の形状が著しく違う事を紹介するための補足として位置づけられ、企画展と合わせて「親子をさがせ」、「マンボウテーブル」を活用することにより、海の生物への興味喚起へのより良い成果が上がった。

⑤主 催 者：笠沙恵比寿（2号機利用）

入場者数：1,112人

成 果：海と船の巡回展アイテムは、小人のお客様に好評であり、特に「ウミガメスマートボール」や「親子をさがせ」等は人気があった。「親子をさがせ」に関しては小人につられて引率の大人ですら一生懸命行う姿が見受けられた。開始当初の6月は梅雨時期であり、行動場所も室内に限られてしまう。見込んでいた人数よりも少し少ない来客数であったが、唯遊ぶのではなく、海の事を遊びながら楽しく学べる本アイテムは小人に受け入れられていたと考える。

⑥主 催 者：ぐんまこどもの国児童会館（2号機利用）

入場者数：25,947人

成 果：「海」をテーマにして、船の科学館巡回展示による海や魚、船について

での体験コーナーや、海藻おしばや流木アートの展示、工作等を行い、前年より5,000名以上の来館者であった。

⑦主催者：八甲田丸（2号機利用）

入場者数：9,090人

成果：「イルカトーク」の効果として、大人から子供まで多くの方々に体験していただいた。9月の大型連休や週末などは、子供たちは興味津々で「イルカトーク」を体験して頂きました。大人の方もイルカのエコーロケーションを理解しながら体験して頂きました。展示アイテムに実際に触れて体験できる展示アイテムでしたので、多くの入館者がイルカトークを体験して頂きました。

⑧主催者：三菱みなとみらい技術館（2号機利用）

入場者数：22,447人

成果：「海洋ゾーン」、「技術探検ゾーン」の展示リニューアルに合わせ、2号機の6アイテムをリニューアル記念イベントの一環として展示し、会期中合計2万人以上の来館があり、巡回展を見学頂き、海事普及の一助となった。

### 3. 博物館ネットワークの保守、運用

ネットワークホームページを活用し全国の海事関係博物館等の情報を公開・運用するとともに、海と船の企画展情報、海と船の巡回展情報、各館イベント開催情報等を広く一般に公開することができた。

①アクセス者数：7,503人

※集計期間：2009年7月31日～2010年3月31日

（7月31日にリニューアルオープンしたため、それ以前のデータは集計できず）

②アクセス者の平均閲覧ページ数：3.92ページ

### 4. 企画委員会の開催

全国の海事関連有識者を交え、海と船の博物館ネットワーク事業の今後の目的や需要等についての意見交換を行い、「海と船の企画展」事業や「海と船の巡回展」事業についての意見を頂いた。また、有識者の清水氏主催の回遊展「クジラとぼくらの物語」についての事例も伺い、当館においても1月より開催し、海洋生物につ

いての普及及び巡回展のアイデアやノウハウ集積の一例となった。

## 5. 支援館の研修会の開催

2006年度より船の科学館が事務局として支援した全国の博物館等を対象に公募し、「海と船の企画展」支援事業を中心とした要望の取りまとめや、過去支援企画展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換を目的とした「ネットワーク研修会」を開催した。過去支援企画展の成功事例紹介では、萩博物館の堀氏より支援活用による企画展成功事例の紹介を頂き、神奈川県立歴史博物館の嶋村氏からは有効活用法についての提案を頂いた。会のまとめとして、マリンワールド海の中道館長の高田氏より「海や船に関する現状と当ネットワークを活用した博物館の役割」と題した講演を頂いた。

合わせて、過去2回西日本にて実施された「博学連携ワークショップ」を本研修会の一部とし、博物館職員及び教員等を交えた博学連携事例作成ワークショップや情報交換、有識者による講演会等を海洋政策研究財団の協力のもと同時開催した。講演会では文部科学省初等中等教育局の田村氏より「学校教育における海洋教育の現状と今後～博物館の有効活用法～」と題した講演を頂いた。

### (1) ネットワーク研修会参加者

①過去支援博物館等：46館48名

合計：48名

### (2) 第3回博学連携ワークショップ参加者

①博物館等：51館53名

②教職員：8名

③その他：6名

合計：67名